

# ラオス視察レポート 4

## 医療事情と主な医療機関 「病院編」



# ラオスの医療環境俯瞰

ラオスの保健行政は、日本の厚労省に相当する保健省(Ministry of Health, MOH)が主管している。この保健省を中心に、中央・県・郡と3つのレベルの行政主体によって保健行政は管理されている。

国内全体からみて医師や看護師は少なく、医療器材などの設備は決して十分とはいえないのが現状である。またラオスの医療機関は主に急性期治療を目的にしており、日本のように長期療養を目的としたものはない。

都市部における病院へのアクセスは平均8km程度といわれているが、地方部では100km近くを要するところもあり、医療におけるインフラ整備の不均衡さは否めない。

日本がODAを通じて支援を行った医療機関があるが、こうした行政レベルの介入以外にも、海外の援助団体等が個々に活動しているといった状況にある。

# Mahosot Hospital (マホソット病院)

ラオスで最も大きい国立病院で、開設は1910年。

24時間の救急対応も行われており、レントゲンやCTも完備されている。医師数は120名以上が登録されているほか、看護師も200名以上の登録がある。

病院の隣には国際的な窓口となる、インターナショナルクリニックが併設されていて、英語で対応できるスタッフが配置されている。

標榜されている主な診療科は次のとおり

- ◆ 内科、一般外科、消化器科、循環器科、神経科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科、産婦人科、歯科 など



# LaoViet Hospital (ラオビエット病院)

名前からも分かるように、ベトナム企業が共同出資している民間の病院である。

診察は日曜日も含め毎日行われているとのことで、内科や眼科、婦人科、歯科といった診察室が、個室ユニット形式で配置されている。

右下写真は4列のCTであり、ラオス国内では設備が整備されている病院の部類に入る。

今回見学した他の病院もそうであるが、ほとんどの病院にウェブサイトの用意はされていない。代わりに、フェイスブックの専用ページがある点、ウェブサイト開設コストの代替として、フェイスブックでの広告効果を期待していることが推察された。



# Settatilat Hospital (セタティラート病院)

セタティラート病院は、マホソット病院に次ぐ規模を誇る国立病院（ベッド数175床）で、ラオスの中核医療機関の一つとして、医科大学生の研修施設としての役割も担っている。医師数は70人以上が登録されているほか、看護師やコメディカルを併せると300名以上のスタッフが働いている。

日本のODAの支援を受けて2000年に新病院が整備されたほか、金銭的な支援だけではなく、日本の大学による教育プログラムの導入など、人材育成面による支援が行われるなど、日本との関係が深い病院である。



# Mittaphab Hospital (ミッタパーブ病院)

マホソット、セタティラートに次ぐ国立病院で、ベッド数は150床。レントゲン機器が3つの診察室に配備されている他、国内初となるMRIが導入されている。

ベッド数では前者の病院には及ばないものの、施設規模と導入設備、施設の新しさという点ではミッタパーブ病院に優位性がある。

道路を挟んだ向かい側には薬局が軒を連ねているが、ラオスの公的医療機関の入院患者は、家族等の付添者が医師より処方せんを受け取り、院外の薬局にて医薬品を購入し、これを病院スタッフに渡し治療を受けるのが一般的との説明があった。



# ラオス視察レポート総括

率直な印象は「脆弱な衛生面」にあった。なおこのことについて、ここではハード面ではなくソフト的なところ、つまり「心がけ次第でどうにかなる部分での衛生面」を指したい。

路肩脇にはゴミが多く落ちていたことに加え、病院内でもゴミがそのままにされていた箇所が何カ所もあり、衛生面における教育啓蒙の普及が遅れている印象であった。

首都ビエンチャン市内の様子を鑑みれば、地方における医療機関の状況は推して知るべしといえるのかもしれない。

人口641万人という少ない人口の影響は、「労働者の質と量」という点も懸念される。すでにより高い賃金を求めて、タイをはじめとした周辺国への人材流出もみられている。

自国における雇用確保のためにも、まずは自国産業の発展が必要という印象を受けた。



\*写真は機内から見えるメコン川